

創刊号



ぱびろにくす

発行 大阪工業大学図書館

住所 大阪市旭区大宮5-16-1

☎ 06 - 952 - 3 1 3 1

ぱびろにくすの発刊によせて
図書館長 杉浦寅彦

大阪工業大学中央図書館の広報誌として、ここに「ぱびろにくす」が発刊の運びとなったことは、関係者の一人として誠に喜ばしい限りである。

学問の新しい分野が拓かれ、新しい技術が発展し、新しい産業が次々と起ってくる今の時代を生き抜くためには、それ相当の覚悟と知識欲、時代の流れに対応できる柔軟な姿勢が必要である。図書館はそのような知識を得るためにも、もっと活用されなければならない。このような時代の新しい波は、図書館自身にも押しよせて来ているのであって、出版量の飛躍的な増大、学際領域や新分野の出版物の増加は、従来のカードカタログの不便さを露呈させ、これに代って電子計算機によるオンラインカタログが実現された。オンラインカタログの能力をさらに発揮させるためには、キーワードの論理演算によって検索のできるシステムの開発が急務で、これを早急に実現するため一層努力しなければならない。また、学術雑誌のアブストラクトのデータベースが着々と海外主要国ならびに国内で蓄積されているが、このデータベースの有効な利用を促進しなければならない。このためにも

近い将来実施される学術情報ネットワークにいかに関与して行くかということが、これからの図書館の大きな課題である。



今や図書館の中にコンピュータ端末が導入され、図書館とエレクトロニクスは切っても切れない関係となった。従来、情報を蓄積する媒体は紙だけであったが、現在ではそれは紙以外の磁気テープやコンピュータのディスクやレーザーディスク等も使用され、将来、あるいはもっと新しい媒体が考えられ、エレクトロニクス出版物の時代が来ると言われている。若い館員の発想によって本誌が「ぱびろにくす」と命名されたことは、これからの図書館を象徴しているように思われる。

今後とも、利用者のよきご理解、ご支援の下に、新しい時代に対応したより良い図書館を目指して館員一同さらに努力を続けたい。

(工大・電子工学科・教授)



□シリーズ□ ～歴代館長が語る～

私の館長時代

田 雅 郎

「標記の題で当時を偲ぶものを書け。」と坂本事務長さんから依頼を受けたが、15年余り前の事なので、私には忘れてしまった事の方が多い。当時の文書も大学紛争の時に散逸してしまったりしく余り見当らない。思いっくままに述べさせて戴くので、正確でない部分もあると思う。

昭和39年の年末に、突如私が図書館長に選挙されてしまった。だから、私は全くの素人の図書館人であった。

当時、本学は阪神地区の大学の図書館人で作っている阪神地区研究会の幹事校になっていた。これは阪神地区各大学持ち回りの会場で、図書館員の研究発表・業務に対する意見交換・親睦その他を目的とする会合で、大体年に3回開かれていた。私は幹事校の館長ということで毎回出席し、研究発表・意見を聞かせて戴いた。また、その際には開催大学の図書館施設の見学もさせていただく習慣になっていた。そのおかげで私は、図書館の勉強をさせていただいた事になる。「私は素人です、意見を述べることは御許し下さい。」という、「いや、素人の人の意見こそ参考になるのです。」などとよく云われた。それを本気にし、随分暴論もはいたのではないかと、今にして思われる。図書館の世界はおおらかである必要がある、それは、ずぶの素人も、読書になじみの薄い人も、極端なことを云えば読書嫌いな人までも図書館にひきつけ、読書に親しませ、文化になじむ生活にもって行くことが図書館一般の使命の一つであるからなのであろう。

就任間もなく、昭和39年第3回阪神地区研究会があった。そこで、いきなり挨拶をさせられたこと。梅花女子大の遠藤トモさん（女性）が「大学附属図書館の背景について」と題して発表しておられたのが印象に残る。そ

れは、明治初期以来の日本の大学図書館史を調べ、図書館長の在り方にまで言及されたからであったように記憶する。その他、大阪市立天王寺図書館長・森耕一



氏の「分類について…最近の分類法…」の講演があった。私の僅かに残るメモには、部会で「複本の整理はどのようにしているか?」とか「部外の方の利用に対する取扱いは、どのようにしているか?」、「参考文献目録はどうしているか?」などの質疑・応答がみられる。この時の研究会場は、丁度完成したばかりの大阪経済大学図書館であった。同程度の私立大学でありながら、床面積1,710㎡、3階建、書庫は6層で30万冊収納出来る立派な独立図書館であった。文科系の、実験設備にあまり経費のかからない大学とはいえ、うらやましい限りであった。当時の工大図書館は部屋住いで、現6号館の3階一床(約700㎡)だけであった。

しかし、1年たった昭和41年4月からは5号館の新築にともない、4階が使えるようになり、面積は倍増し、一般図書室と参考図書室が分離、閲覧室も拡充され、やっと図書館らしくなったのである。当時より15年前大学開学2年目の昭和25年、大学に図書館が設けられることになる。後々初代館長になられた故宇井潔先生を頭に、後の事務局長久保清さん、現史料室長の奥村吉男さんらが図書充実のため苦勞して集められた本で、やっと小さな一室に図書館が開かれたのであった。それを思えば夢のような進歩であった。なお、昭和41年当時の館員は館長を含め18名(内高専2名高校1名)であった。また年度当初予算は約

4,500万円（人件費は別）であった。それから約15年たった今日では、独立図書館が建ち、コンピュータが導入されている。まさに、隔

世の感があるのは理の当然かも知れない。更に、15年後の将来はどうなっているだろうか。
（2代館長・工大・一般教育科・特任教授）

新聞に見る図書館

篠塚宏三

最近、図書館の問題が新聞記事に取り上げられることが多くなってきたように思う。今年、朝日新聞の大阪版と近郊版で気がついたものだけで次のようなものがある。5月、「公立図書館はいま」の見出しで6日間連載した他、「図書館を考える・堺でシンポジウム」-3月、「図書館の国家管理ごめん」-4月、で図書館事業基本法に関する記事が掲載されている。図書館利用については、「市民1人に年4.6冊、松原の図書館利用まとめ」-5月、「主婦や子供に図書館人気」-10月、として大都市近郊の公共図書館の異常なほどの繁盛ぶりを伝えているし、大学図書館でも「図書館利用をどうぞ」-11月、で京都府立大学が府民に閲覧の受け付けを開始したことを報じている。

また、図書館の建設について、公共図書館の新設計画（長岡京市・西宮市）や新設構想（東大阪市）建てかえ（泉大津市）、用地費の計上（摂津市）などがあり、大学では「日本一の大学図書館・関大、11月に着工、蔵書150万」-11月、がある。

さらに計画内容について、「図書館に学習室は必要か・新築計画の西宮市で論議・本の貸出しが本務/準備委、いまの住宅事情では/市議会」-9月「閲覧室ない図書館？市が議会委で説明」（奈良市）-11月、と公共図書館の閲覧室に関するホットな問題もとりあげられている。

一方、図書館業務については、「民間委託変えぬ・市教委・港図書館貸出し業務」-3月として、今、図書館界の関心を集めている問

題や、「業務全般を自動化・独自のシステム開発し・大阪工大・図書館総合情報処理システム」-毎日新聞3月、などが報じられている。



ところで、ひと昔前の図書館といえば、古くさそうな感じの本、受験生や学生が占拠している閲覧室、などのイメージがあって、住民が日常生活の中で図書館は利用しにくいものであった。このような公共図書館が1960年代後半から大きく変わってきた。それは個人に対する館外貸出しが年ごとに飛躍的に増え続けているということである。これは公共図書館の基本的な任務は、貸出しとレファレンスによって資料を求めるあらゆる人々にこれを提供する。という考え方が打ち出され、これに基づく図書館活動の大きな成果であり、建物も閲覧室に変わって開架室が主要な部分を占めるようになってきた。新聞の表現を借りれば「……公共図書館が、このごろは「何でもどこでも、だれでも」をモットーとし、買い物かごをさげ、子ども連れでも気軽に利用できるようになった。……すっかり身近な存在に様変わりしている。」ということになる。

新聞に見るこのような図書館の動向は、建築計画に携わる筆者にとって、興味ある問題として目を惹かれる。

（工大・建築学科・助教授）



パイプと手帖一冊で仕事ができるか

能 勢 豊 一

「資料やコピーの持ち過ぎ。それに長電話。こういうのに限って仕事ができへん。僕なんかパイプとこれ（手帖）一冊でテレビもラジオも講演もやりこなしている。」正しく、walking dictionary である。しかし、このように言っていた当人だが、実はパイプと手帖一冊だけで仕事をこなせていたわけではなく、何人かの手足となるスタッフがいたらしい。確かに、誰もがパイプと手帖一冊を持てば仕事ができ、勉強ができるのであれば、結構な話である。

世界で一年間に消費されるコピー紙を積み上げると、エベレスト山の500倍の高さになるという。今、自分の机の周囲を見回してみても、コピー資料の多さに驚かされる。また、図書館から借り出したり、書店で買った書物・新聞・連絡物などが山ほどある。ひとりの人間に集まる情報はいまや個人の持つ情報処理能力をはるかに超えている。所有するものが多くなれば、心はそれに囚われて、新しいことができなくなるという。情報も多々ありすぎると、人間から新しいことを考える能力を失わせることになる。

世の中、使い捨て時代といわれてからもうかれこれ10年は経ったであろうか。一方で省資源・省エネルギーと言われてきたものの、この使い捨て感覚は確実に進行している。現代は、物や情報が溢れている。価値観は人により、また同じ人であっても時期を異にするとそれは一定でなく、終生大事に一つのものに執着することもなくなった。先日、私は七

年間乗った車を売却した。五千円だった。どう見てもまだ数年は乗れる車だったし、また2~3の部品を見積ってもまさか五千円を下るまいと思うのだが…。



「勿体ない。勿体ない。」こういう言葉を聞くのも珍しくなった。

「取捨選択」という言葉がある。何を取り、何を捨てるかを決断できるよう、自分の行動にしっかりとした目的意識を持ちたいものだ。時には、目的のために両手にあるもののいずれか、あるいは両方を捨てる勇氣が必要である。

工大の図書館には、書籍、雑誌等をコンピュータで集中管理する全国にもまれな素晴らしいシステムが完備されている。だから私は安心してこの図書館を自分の書斎のように利用させていただいている。このように近代設備の整ったファイリング・システムが取り入れられているのだから、今必要のないものはどんどん処分するし、また不必要なものはコピーしない。それでも不安なことはない。情報も多すぎると思考力を低下させる。その意味において、情報のないところに身をおいて、自分なりの考えをきれいに組み立てていく時間が一日のうちにはあってもよいと思う。

(工大・経営工学科・講師)



編 集 後 記

2代館長・田先生には、ずいぶん無理なお願いをした。文中「僅かに残るメモには…」

とあるように、当時の記録にまでおよぶご苦勞をおかけした。

ともあれ、創刊号の発行を喜びたい。